

晴れわたる空のもと

晴れわたる

空のもと

林には鳥啼けり。

けふもまた

あはれ鳥

何啼くや

ほがら音に。

鬱憂に、

歡喜に、

われは聽く

汝が聲を。

しかはあれ

永劫に

かかはらぬ

生死よ。

汝が心、

我が心、

とこしへに

かよはねど。

かよふなき

よろこびに

ああわれら

生きてあり。

ああわれら

よろこびに

生きて啼き

生きて聴く——

晴れわたる空の下^{もと}

明日^{あす}もまたかくあらむ。

時計の歌

柱の上にたゆみなき

時計のひびき、かつ絶えて

また耳に入る夜の闇に

あゆみとどめぬ夢の音。

うつつに聴くや君もまた、

眠の夜の床ちかく。

壁につたひて氣倦き音

闇にはひとりひびけるを。

深き夜なりき、時につと

鳴りこそわたれ古時計、

ほちほちと吐く音のゆるび

疲れくるめく闇のこゑ。

何の痛みか身をきざむ――

惱みて打てる銅振子。

信仰と牢獄

朝は來ぬ、尼ら讚へぬ、
さんたまりあ。

晝きたり、大伽藍、
鐘ぞ鳴る。
さんたまりあ。

ああ夕、遂にきたりぬ、
尼らみな齊しく歎く。
さんたまりあ……。

青色の鱧

暗き夜にわれ眠るとき、わが心
また醒むる時。わが額に「想」ぞ囁す。
そのかたち愁ひの中に見まもれば
面も曇れる一列ね深く沈みて
青色の歎きの鱧ぞならびたる。
かくもなほ色あをさめて並居たる

鱧のかずかず、そをしまた透かし見すれば
その昔の「追憶」を焚く黄の燭
揺れてひとすぢ、はかなげに迷ひ立ちぬる。
憂悶や、散る風もなき夜の底に。

また、さあれ絶えて睡の床の上
わが額の上へにうちみだす「想」の囁子、
騒どける奇しき曲かに照りうかぶ
青色の鱧、その列ね、その黄の燭、
なげきつつ夜にこそ沈め、目のあたり。

静かなる沈黙のゆらぎ、そが中に
かくて残るは黒き澱、凝る「想」か。

噫ひとり我れ眠る時、眠る時、
昔の戀の歌ごゑの夢の深みに
青色の纏の歎きの沈み入る。

暮色

あはれ見よ、街の暮れがた
とどろける悲しき響
騒じ立つ色のもつれを。

盲ひたる空をひたして
ふりみだす雨の垂布、
病める音は地に沁み入る。

灰色に暮るる薄闇、

そのなかに暗き歌ごゑ、
瞽女ふたり浮び連弾く。

連弾や、街の暮れがた

底深く沈み流るる

大川の饒うる夢路に。

ややあれば惱みの燈火

倦み黠り、はやも青みぬ。

なほ暮の淀むひととき。

悪の泥濁るかたへに

白楊、影も冷えびえ

消えがてに泣きもこそすれ。

うすれゆく濡れの一色、

疲れ轆く愁ひの心

とどろきは雲間をみだす。

かかるとき響と色と

縊れからみ、つとこそ歎け、

あはれ我が街の暮れがた。

森林にて

沈黙の森の夕に
煌めける蒼き星
奥深く、ひそかに動き
色黄なる落葉は
吐息して地に沈めり。

愛も、また
命も、歌も、

ここに於て、かくは滅びむ。
あはれ見よ、森の奥より
煌めける蒼き星——
風はただ暗くさまよひ
悲しめる我が魂は
をのきて忍び泣く。
さらばただ
ほろぶるや
死を待つや
かかる夕に。

晝と夜と

いとほのに
ひらく花
そのひびき
我が胸に
晝すから
つたへきく。
されどまた

萎えゆく
哀しき香、
そこはかと
沁みて聴く
夜すがらに。

いたましき
我が愛は
君を見て
絶え間なく
色變へぬ
晝と夜と。

深夜

物の色文目もわかぬ

夜の氣に憂も深く

いとほのに沁み入るにほひ――

草ゆるくひそかに動く

野の上を、ふところぬるめ

なま青き風のいざなひ。

懈しげの心めざめぬ、
重きわが臉に融くる
風よ、ああ暗き愁よ。

惱ましき憂愁の影ぞ
夜の野を、のがれこそゆけ。
草を摺る懶さひびき。

さあれ見よ蝮の草原、
光なくつづくいやはて
低き空、雲ぞ明かれる。

籠え浸る大空の夢、

その夢の襞の斷目に
さてしもや遠き一すぢ――

聴くは彼の他國の市の
海映か、雲のひろみに
さりげなくゆるぶ光よ。

さてしもや遠き一すぢ
目のあたり薄るるけはひ、
蝮の野は暗く冷たし。

いづくにか、あはれ蟲の音、
ほそぼそと啼きもいでぬる、

ほそぼそと聲も絶え絶え。

なほ迷ふ憂愁の影の
わづらひの風のをきふし
その闇の底に蟲鳴く。

霧

たそがるる森の彼方に
沈む雲、雲のひまより、
ほの白き光に照れる
寂寥の片われ月よ。

晩秋の疲れし風は、
力なくなほもひととき
物影を空にみだして

木梢^{こしな}吹き音^ねをこそ立つれ。

かかるとき夜の霧にぞ
ものなべて消えゆくけはひ――
森かげも、寺の薨^{ひら}も、
はた水の堰^{せき}かるる音も。

なほひとり、されども霧よ
我が胸は汝^なと離れたり。

闇

ひそやかに語りてわたる
橋もとの柳の下に
右左、影はわかれて
つと消ゆる闇の人人。

星かげは街に沈みて
にごり川、水音にぶし、
芥場あぐさばに動くを見れば

そは飢ゑし露地の瘠犬せまいいぬ。

街の風、旋つむぎを捲いて
ふと起こり、ひろごりのぼる
闇の辻、たましひ幾つ
吹かれ消ゆ人の蹠音あしのとに。

黙黙とうなだれあゆむ
わが影は闇に口觸る。

鴉

凝りたる

冬空の、

色蒼さ

ためいきや。

風もまた

吹き絶えぬ、

黙ずめる

野の雪に。

雪歇みて

いつしかに

沈みゆく

赤き月。

照り顔ふ

目路のはて、

憂愁ぞ

かがやける。

その中に

鴉こそ

ひそびそと

迷ひゆけ。

赤き月、

赤き月、

地平にぞ

今沈む……

路傍の想

火を噴く水の行手には逆るとも

恐れじ、たとへ肉爛れ、蹠やぶれ

心渴くも、あるはまた我が行く道を

断たれぬるとも飢餓の海裂けて見ゆるも

歎くべしやは明日知らぬ命のゆくゑ。

こころもとなき日の旦、暮るる夕よ、

けふも獨りしながむれば

薨^{いづか}の波の空のもと風黄に募り
色も悲しや雲の脚迷^{かしまよ}ひ立ちたれ。

さてはうつらふその果てに我が墓ありや
明日^{あす}知らぬ命のゆくゑ
それゆゑに我れはおそれじ。
もの憂き生のまぼろしよ、
爛壞^{らんま}の都會叫喚の街も日暮れて
目にただ痛み電光ぞ青く閃めく。

鉛の華

鬱憂の我が心の原に
咲きいでし鉛の華を
一瓣^{ひとよ}摘み、つみつつ嗅げば
肉顛^{しん}ひ、靈^{たまし}わななく。

悪の香や、げにもうるはし
その花の、その色の
息絶えて咲ける見よ、

わが魂は酔にしも
とらはれて命病みたり。

げに堪へがたきかな、その強き
媚のゑまひ——
一瓣摘み、つみつつ嗅げば
肉顫ひ、靈わななく。

港 江

疲れて熱き日の暈
たゆみ漂ふ波の上
愁さそひて笛鳴れり。
港の入江、八月の
日暮れむとして雲は蒸す。

穂がしら何かうち騒ぐ
終日波に力あり。

心^{ココロ}渴^かくや底^{そこ}の泡
熱^{あつ}き潮^{しほ}こそ流^{なが}れたれ。

空^{あか}かきみだす船^{ふね}けぶり
鋼^{かな}具^ぐのひびき、鉦^{かね}の音
もろもろの聲^{こゑ}ひとときに
開^{ひら}け、舞^まひのぼり立^た迷^まひ
海^{うみ}をふるはし、い揺^ゆるを。

入^いり來^くる船^{ふね}の緑^{みどり}色^{いろ}、
ペンキ^{ペンキ}の色^{いろ}の日に勻^{ひと}ふ
または息^{いき}吐^はき泊^はつる船^{ふね}、
走^はれる解^はき、か^かがよひて

うつり浸^ひれる波^{なみ}のかげ。
ひとりおそれぬ——かかる日^ひの
かかる夕^{ゆふ}の港^{みなと}江^えに
巨人^{きょじん}の手^てあり、何^{なに}ものを
築^たくや、あはれ八月^{はつげつ}の
光^{ひかり}はなほも海^{うみ}を燦^{きら}く。

八月の一日

落日いま

遙にわらひて

煉瓦屋の

彼方に沈む。

今し見よ鐵板の罐を積み走る赤き自動車。

うと照り呻び街をゆく「7」の記號の照りかへし。

支那街に

ちやるめら歌ひ

青服の子は豚つれて

空き地をあゆむ。

あはれ、あはれ入日の光。

港には航路船あかあかと旗をかかげて、

いと暑くせはしげに海上に笛は鳴りいづ。

「新嘉坡行午後六時」

いと高くと長に海上に笛は鳴りいづ。

あはれ落日。

居留地の銀行の
その扉、すてに閉づれど。

なほさあれ、燃えつつ挑む夏の空、
狂氣のごとく雲みだれ歌ひつれぬる、
そのなかに今か沈まむ
いやはての
入日ぞわらふ。

溝の蠅

かき曇る曇は空を
たゆらにも浮かびとほりて
心なきさまに影しぬ。

日のなげき深きためいき
病めるわが魂の愁よ、
仰ぎ見る夏の日のかけ――

こころ怖ぢ眼疲れて

我れは踏む、熱き日向を。
かけわたす惱みの橋を。

橋の板、時にあやうし、
橋の板、乾割れぬるより
まのあたり洩れ透く水の面。

乾割れぬる板目の下に
なほ暗く青き水の面に、
をりからや蒼蠅ぞ歌ふ。

悪の歌、夢のつふやき

をりからに蒼蠅ぞうたふ
あざれたる溝の眞晝を。

そをば聽き我肉顫ふ、
何知らず我肉顫ふ、
絶え間なき蒼蠅の歌よ。

くらげ

夏の日熱き渚べにうち寄る波は
ひもすがら懈怠の夢をくりかへし
黄なる水泡はふつつと砂に喘げり。

くらげこのときつと浮きぬ沈みぬ、あなや
力なく寄らんともせずさらはれて、
またも漂ふ波の上、渚は遠し。
渚は遠し、海づらは風吹き絶えて
聲もなき焔の深み——ただ迷ふ
熱き日、波のくらげにはあゝ「道」もなき。

二十歳までの抒情詩

雨ふる日

雨ふる日煙の小野は
しめやかにうるほひ濡れて
青鷺は啼く音も低くに
わたるらむ、高草の國
晝の日は白く輝き
皐月空ひらめく雨の
まばらなる粒をてらしつ、
てらされて消ゆる白珠——

ふる雨は五月の草に
幽かにも落ちて響かむ。

あゝこの日遠里越えて
畠中の小徑いくつか
行き、またも堤をたどる
旅人は若きころに
ふるさを思ひうかべぬ。
あえかなる妻のえまひは
みどり野の樹叢を透きて
圓くさす日光のさまと
濡ぢつつも急ぐ海路を
日はさなか雨こそ霽るれ。

野は今し夢より醒めて
まぼろしの瞳にうつる
甕酒の香のしたたりに
酔へる如——白き日包む
雨あがり、黄なる牛は
牧場みち泉に影し
風ぬるく草の實熟ゆる
地を吹けば敷波青く
ゆらゆらとはてなく野揺れ
鳥のかげいくつか過ぎぬ。
あゝ生のよろこびみてる

新らしき生命の薫ゆり
觸れやすき旅人の胸に
美し鳥ひと日は棲みて
黄金色、枝もたわわに
追憶のさは熟む果實
啄ばみて巢をこそつくれ、
さなり、今、虹のごとくに
五月野のおもひは白み
いつしかに眼うるみぬ。

古 徑

古徑は我胸のごと
月光の下に照らされ
春の暮、山のあなたに
影くらく長につづけり。
いつの日か深くも路を
石喰みて車過ぎけむ
二すぢに軋めるわだち――

痕のみぞ黒くのこれる。

「追憶」のあゝいたましき

あとを見よ、日日に壊えつつ

ほろびゆく「愛」の胸には

「悲愁」の小草ぞしげれ。

月青み、夕となれば

またおもふ、山のふるみち。

鐘鳴る晝

たえまもあらぬ晝の雨額になやまし。

登けふも祈禱のきざはしを

のぼればさしむ青色の寺院の扉、

勤行の經の御聲ぞうるみたる。

あかるき雨の日のしめり仰ぎうかがふ

雲のひま空は密語にかきたれて

歎きにあはれ薄曇る皐月の眞晝、

はやも聴く梵音妙の鐘の音を。

梵音こそは鳴りわたれ、臯月の眞晝。
雨のうち——煙れる堂の尖塔に
このとき鳩らみだれ飛ぶ迷はぬ姿。

たえまもあらぬ晝の雨額になやまし、
我が愁ひ何を祈らむ、蒼びれて
魂はひた聴くうつろなる御堂の鐘を。

晝の曲

高麥の穂になびき寄る風の夢
ひかりの末にわれは聴く、懈怠の歌を
蒸し挑む熱き歎きを、沈静の
はた寂寞の晝の曲、強きひびきを。

そことなき重きためいき青風の
やをらゆるげば蟲の羽も睡に光る
夏鳥のもの狂ほしさ、惱ましさ、

乾ける土も一色に干割れ立ちたり。

かつは聴く、熟えて滴たる日の咽び、
群れ咲く罌粟の甘き死にひたと接吻け
眠りたるその猥らなるつぶやきも――

野のはて遠く夏雲のあく出づる時……

五月ひるすぎ

五月ひるすぎ

軟風の、野面にうかぶかがやきよ、
ゆらゆる歌のまぼろしよ。

あはれその

歌のまぼろし

あはれその

風のかがやき。

眼閉づればその中に光ぞひびく、
日のゆらぎ過がひみだるる影の文、
青き木立の合歡のかけ、仰ぎ伏したる
我額に蒸してくゆるるもろもろの
光の息のなやましさ、心も浸り
いつしかにあまき白日の夢も趁ふ、
南の國の風に咲く五月の花の
幻の透き入るなべに日のかたに
聴くとしもなき夢ごころ聴くは彼方の
岡ゆ鳴る青き寺院の鐘樂の
妙なるしらべ、息深く消えゆくひびき、
はて遠く空にただよふ鳥のむれ
影もうるみて野の末を戀ひ鳴きわたる

ひそめきも、あるはさきぬれ、ほのに今
青草ゆるき敷浪の樂のをきふし、
過がひとぶ蝗の群のもろつばさ
輕き羽音を、うつつなき蜜蜂の歌を。

五月ひるすぎ
軟風の野面にうかぶかがやきよ、
ゆるゆる歌のまぼろしよ。

あはれ、かの、鳥のひそめき。
あはれ、かの、若き鐘樂。

五月ひるすぎ夢に入る。

燕

皐月の浪を越えわたり

野をこそ慕へ、つばくらめ。

野をこそ慕へ、つばくらめ

求めあぐみたる古巢ゆゑ。

緑の岡の鐘樂の

ひびきの方に青岸に。

求めあぐみたる古巢ゆゑ

野をこそ慕へ、つばくらめ。

白晝

あふぎ見たまへ、かの光
白く顫へてしたたるを。

われらが胸にしたたるを
はや聴きたまへ、晝とほき光の痛み
樂欲のまぼろしうかび眼くるめく。

顫ふ光を日のいろを

ひたに哀しみ戀ひ溺れ、弱音に細る
情念の泣き入りゆるぶ節節よ。

身うちにからむ虹の色、
渦まき起る脈管の蠢惑の嵐、
赤き死の歡樂きたる血のゆらぎ。

膚につのぐむ薔薇の芽、
千萬の息の香のきほひかきろひわたれ
噫われら死ぬらむほどの氣どほさに。

さもあれ君よ、狂ひ刺す
露はに熱き胸肉の上にし聴けや

なほ光したたり落つる彼の聲を。

死にやは至る樂欲の
苦悶の光なほ滴る。

あはれかたみに抱けども
切に戀ひ泣き歎けども。

死にやは至る樂欲の
苦悶の光なほ滴る。

まひるの渚

青海の渚にちかく
群れ咲ける玫瑰の花
夏の日の光に酔ひて
夢の如深きかをりに
うなだれぬ、人はこのとき
静かなる眠に入れり。

波の穂は日光に白く

海面は聲だにあらず、
今し見る雲の一ひら
おほらかに空を劃りて
動くのみ、真晝の渚
火の如も沙は熱し。

時につと影は斜に
磯ばたに映る白鳥――
南國の酷熱の日に
あな鷗、翼も濡れて、
かつめぐり何をか惑ふ。

玫瑰のむらがる簇は

つづき咲き真紅にただれ、
水ちかく走る蛇
動くもの鳥あり、されど
人よ疾く醒めよ真晝の
渚には「おそれ」來れり。

夏の林にて

戀ごころ、

君にむかひてひたぶるに

身うちわななくあゝ夏の晝の幻——

我胸は

汗あゆるまで日の前に

おほふすべなくあらはれて

眼は熱し。

かぎりなきあこがれ心地

さまよふに

涙あふれて頬につたひ思うるほふ。

愛少女よ、

知るや林の日の下に

かくぞわづらふ若人を。

燃ゆる命を。

南方の五月

夢見るさまに空晴れて鳥の影映す
南國の臯月一日のそぞろゆき——
廣野の雲はゆきかへり目路ははろばろ、
風わたる嫩葉の木原裏がへる
葉並は白くみだれつつなびき動けり。
あゝ春の光は走る草の上に
野にみつ花のたましひの夢もや融けむ。
水飼場沼の水面はなだらかに

湛へし彼方柵を超え草を踏みしき
牛鳴きて水に浸れる波の紋、
黄なるは起き、白牛は緑のかげに
よこたはり大き腫に歡樂の
色をうかべぬ、一樣に野の息蒸して
かもさるる酒の如くに中空は
泡立ちうるむあゝ春の日ぞ今さなか。
をりからや緑くゆれる草叢を、
つと立つ雉子、輝かの翼はたはた、
葉のひまを、木立のひまを、いと低に
強くぞ羽搏て、隠れ入る樹深の森は
うるはしき花咲きみだれまばゆしや、
(こは幻の愛の宮) ほのかに透ける

晝の光、黄金色をただよはし
熟睡に圓き葉は垂れてうち重なれる
髓かをる樟また合歡や南國の
皐月のしげみ——ふと思ふかかる日いつか、
森に入り、花摘み語る戀人の
清眸をや見けむ、あこがれの心にうつす
髪長のうつつのたをや目のうるみ……
そぞろありきの晝の路——森の木蔭を
辿りつつ光に酔へる我がこころ
烈しく渴く愛欲に胸こそ躍れ、
南國の野には影して晝遠く
五月の雲はあくまたも光を孕む。

磯の夕

青すすき堤に高く
むらがるる繁みのひまに
水の色ほのかに白く
夕暮の海は洩れ透き
風かよふ小徑の上に
二日月細く浮かべる
とある日のとある磯邊を
愁ひつつわれはあゆみき。

沖のかた斜に空を
薄れ雲ほほけてなびく
島のかげ黒ずみひたり、
磯林けぶれるあなた
はるばると水をたたへて
海に落ち渦巻く水脈の
つらなれる大河の末を
蓆帆の一つは過ぎる。

膩浮き、貝殻沈み
暗愁に淀みてふるさ
鹹水の土橋わたれば
鹽を焚く煙のにほひ

のろのろと小屋を流れて
磯かげの花に引き這ふ。
ものなべて寂寥深く
一時の夕に喘ぐ。

遅ましき男、此とき
腕に網をからみて
のぼり來ぬ。子にかあるべき
喚きつつ語りしたがひ
老幼のふたりはあゆむ。
あゝかくて日は暮れはてぬ、
何ごとか心は知らず
ただ洩るる深きためいき。

夜となる前のひととき

暮れてゆく山のさびしみ、
暮れてゆく空のなげかひ。

いつしか青む谷あひの山の湖、
顛ひ泣く檜葉の樹立の薄あかり、
ありとしもなき風の音、静寂のゆらぎ
その中に降りもいてぬる雨の布。

ほのに燻れる初夏の合歡のうるほひ
濡れまさる薔薇の百合の樹のしげり
暗さ心のないさぐる愁のひびき、
ひそびそと沁みゆく雨の忍び音よ。

暮れてゆく山のさびしみ、
暮れてゆく空のなげかひ。

いつしか青む谷あひの水のせせらぎ
聲うるみ音も絶えだえに咽びゆく
流れにひそむ夕あかり、鈍き夢色。
はかなげに消ゆかに歎く霧の胸。

おぼめく山のかげひなた時としもなく
薄映ゆるなやみの雲のおぼつかな。
山のあなたの坂路を、さても軋む空車、
それさへ濡れて夜となりぬ。

棕の花

水無月の谷の夏かげ
鳥の聲
遠くかくれて
青き空、
はつかに洩れぬ。

棕の花

幽かにゆれて
暗緑の中にほの透き

冷やかに光はうごく。

草の根の白きを洗ふ

水のみぞ音を立てぬる

静けさに、

語れる二人。

やや無言、

かかる中にも、

ふとしもや

戀をおぼえて

見かはしぬ、

燃えぬる腫。

青き國

夏の日なりき

風吹かず

水はよどみて

藻の花の

夢を絡みぬ、

ひたひたと

つぶやく波の

音のためさ。

このときうつれ
（水の面こそ
げに古鏡）
青き國。

青き國また
消え消えて
かくてうつらふ
淵の面、
蟬とびすがひ
ちちと啼く
透羽も影せ
岸の渦――

日なかごろなる
しづけさに
流れは眠る
晝の夢。

窺ふときに
幻の
國は光れり、
あゝ戀も――

朝空

路やがて草叢に入る
初夏の旅の朝空、
遠方に白雲動き
雑木に光ながるる
尾をのぞみ山の小村を
つと出づる心は若し。

このあたり石ころ多く

灌木の林の繁み、
葉おもての影は葉裏に
透き入りてこぼるる光――
地に沁む雫もろとも
煌めきて落つる朝の日。

山上の池より落ちて
めぐる水輝よひ走り
浸浸とうるほふ岸の
草はみな白き花咲く
山の原、山の中みち。
出でてまた林つらなる。

東の間の心に消ゆる
うるはしき物の思は
玉つなく夢にも似たり。
その玉をわれは夢みて
のぼる路——坂の彼方に
をりからや牛車のひびき。

露濕りうるほふ草を
敷きなびけ斜にくだる
音早き石積ぐるま、
狭き坂、礫をくだき
しづかなる林に入れば
合歡の花幽かほふるふ。

石切場かくて近づき
鑿の音、石うつみだれ——
いづこかもほのに聞えて
閑古鳥谷の彼方に
ほう、ほうと鳴く音もうるむ
あゝ朝の山の細みち。

丘の家の窓より

丘の家の小き窓より
ひるがへる青海のごと
春の日の光に酔へる
野は見えぬ、雲ははろばろ
浮き沈み卯月の空を
行きかひて夢を見にけり。

ゆたかなる晝の沈黙に

緑なる森はかがやき、
音もなく花散りかへる
水面には樹の影泛かび
うるはしき思ひの中に
ゑがかれて映る窓の邊。

窓のべに小鳥は啼けり、
たゆみなき思を織りて
ほがらかなる高音の小鳥
戀をする人を慕ひて
春暮るる若葉の繁み
丘の家の上に啼くなる。

君と住む窓にはちかく
枳殻がらたまの白き花咲き
ほのかなる夕となりぬ。
あゝかくて暮るる光に
何ごとか知らず心は
寂寥さびしみをおぼえそめぬる。

月光と憧憬と

月光の中に國あり
波寄るや、ほのかに白き
花の色、花の一簇ひとばら
清歡きよこがか憂愁うれひか、はたや
樂の音の流れいづなる
ときめきか、さても知らず
ただ熱き思ひの中に

静かなる國を慕ひて
静かなる愛をおもひて
あこがれの涙ぞつたふ。

鷗

日は臯月きげ軟らに風は吹きわたり
鷗は群るる、わだ雲の柑子色かんじいろなす
空のはて海坂超えてしらじらと
來しや、翼も清らなるあはれ白鳥。
鷗は群れぬ、日もすがら磯の青波
うち浸す岩かげに、また光る海
光る波路に、南國のうるほふ花の

幻かこれはた過がふ濡れつばさ。

鷗よきたれ、舷に白帆のかけに、
いざ汲まむ若き愁を、海に倦く
旅のころを——かく戀ひぬ一日海ゆく
船上の甲板に若き水夫らは。

その夜

月ありき、
水は流れき、
あゝその夜汀にちかき
青蘆の中に啼きける
川千鳥、濡れ羽のひかり
静かなる色にほふや
今もなほ——
かくはおもひぬ。

月光の

無花果のかけ、

立ちて聴くすすしき響。

あゝその夜、風にうかびて

はろばると川面は白く

野上より牧より笛の

つたひ來し

今も忘れじ。

かくわれは

その夜を戀へり、

さすらひや吉備の一夜の

水岸みなぎしにたわやの髪を

うちなびげ歌をうたひし

一目見し月の光の

少女ゆゑ

さては忘れじ。

木曾川

木曾川や、宿場しゆくばにちかき
街道の小家つづきは
戸を閉まして深き霧しぬ。

からころと響く荷車
誰たが唄ふ唄か、沈める
夜の空に顫ふ一節。

旅人はかかる折から
蒼白き月に影して
足あしづか疲れ、町に入り來ぬ。

枯柳かれやなぎ、片側町の
掛行燈煤けし宿を
たたきなば夢や凍らむ。

冬の夜は千鳥戀しや
しば鳴きてわたる川下かはしも、
水遠く白き木曾川。

ふるさとの

ふるさとの

小野の木立に

笛の音の

うるむ月夜や。

少女子は

熱きところに

そば聞き

涙ながしき。

十年経ぬ、

おなじ心に

君泣くや

母となりても。

厩

こと、ことと厩より

音きこゆ——

深き夜の静けさに、

なほひとり眠らざる獣は
息あらし。

生みし子は二日まへ

死したりき。

母の馬、さびしげに居残れる

厩より音きこゆ

こと、ことと——

水

山上の

おちくぼに

たたへたる

ふるきみづ

あまぐもを

うかべたり。

いつよりか

かくたたへ
いつまたも
乾ぬべきや
山上の
あゝ水よ。

芽

埋れたる冬の眠の

とけや出づ、

春のひかりにももの蔓

南にのびて

勢ひかに、ふく芽はつはつ

野の胸に

さざしぬ、こころ。

こは若き希求か、み空を
うちあふぎ

青き芽ひらく葉の蕾

光をつつみ

朝の日に夢見るさまと

あゝ野にも

「命」はかよへ。

渦

合歡の樹の繁枝しげえより
蛇立ちて
淵に入る、
淵の水みづ濃青こゑをなる
渦うずをまぐ
眞晝まひるごろ。

とろ、とろと渦の音

夏の日
は
めざめたり。
天地あめつちはさながらに
骸光からひか
穢けのむくろ。

つと起りすべりゆく
蛇うつす
水の上。
とろ、とろと渦の音
夏の日
の
晝さがり。

晴間

八月の

山の晝

明かるみに

雨そそぎ

遠雷の

音をきく。

雨の音

雷の音

うちまぢり

草は鳴る

八月の

山の晝。

をりからに

空青み

日は照りぬ—

静かなる

色を見よ

山の晝。

來る畏れ

石高の原の舊道

こぼたれて郊野につづく

夏の日の熱き日向に

蛇は熟睡に圓き

夢を見ぬ、影はくづれて

ほろほろの土に引き這ひ

萎えたる小草は喘ぐ。

をりからに高草あつき

寂寞の郊野の上を、

ふとしもや火のごと沈む

水の上を、風こそわたれ。

何ごとぞ鳥は斜に

草に落ち雲は動けり。

沈静の中に眞晝は

なほ眠る息を聴きつつ

蛇の夢を抱きて

おだやかに大擾亂の

ひとときの前に事なし。

されど見よ、野の雲動き

雲動き、風はわたるを。

愛のふるさと

ふるさとの合歡あはれの樹蔭こかげに
君とわれ立ちて相見ぬ。

戀しさに海越えわたり
今は來し「愛のふるさと」

幾たびか夢に見にけむ
うるはしき君が瞳よ

その瞳われにむかひて
輝かに今ぞ燃ゆなる。

邂逅あひまふ白晝まひるの樹蔭こかげ

日の前に小鳥は啼けり。

あゝ小鳥今はわが胸
汝なが聲にとどろきわたれ。

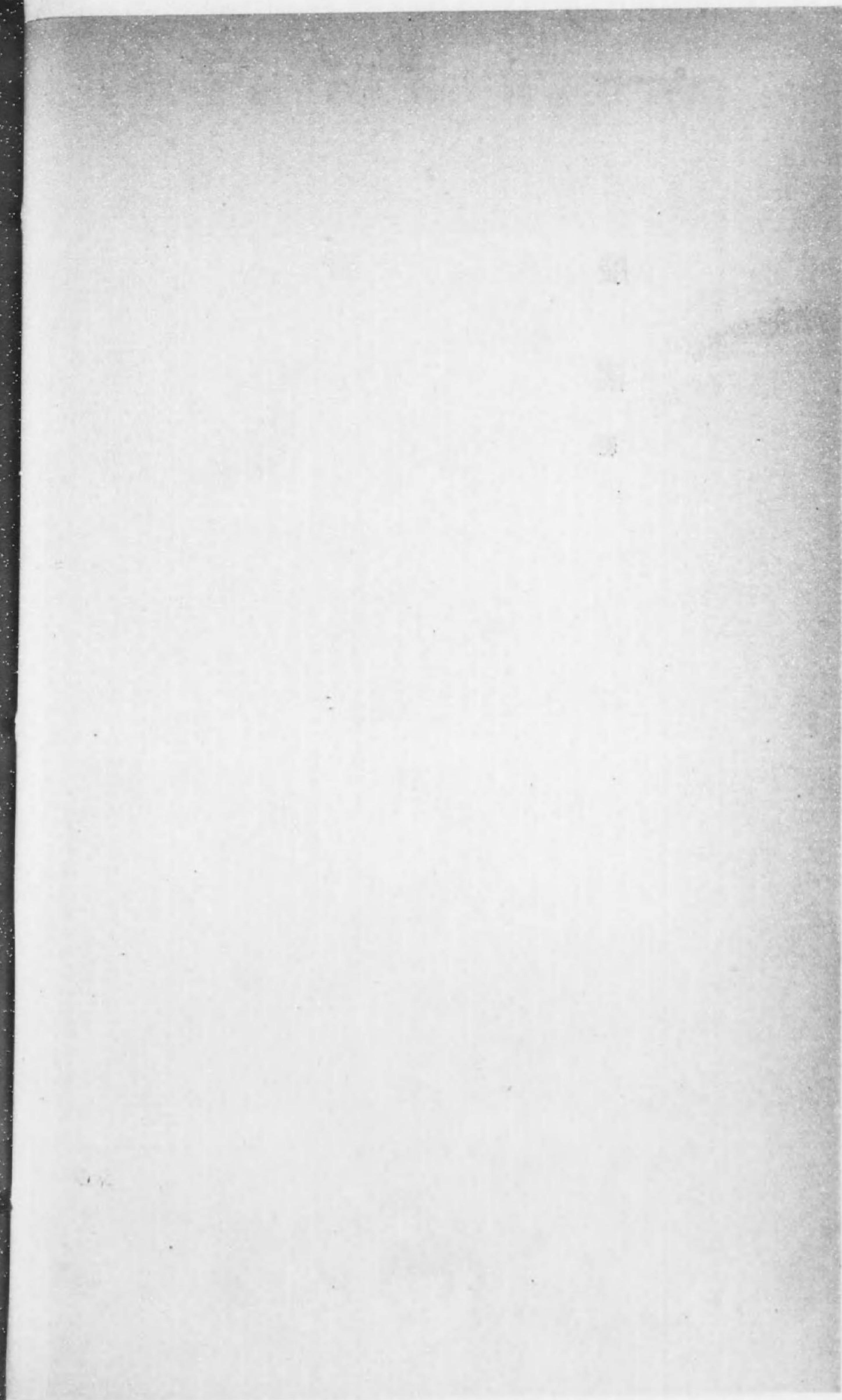
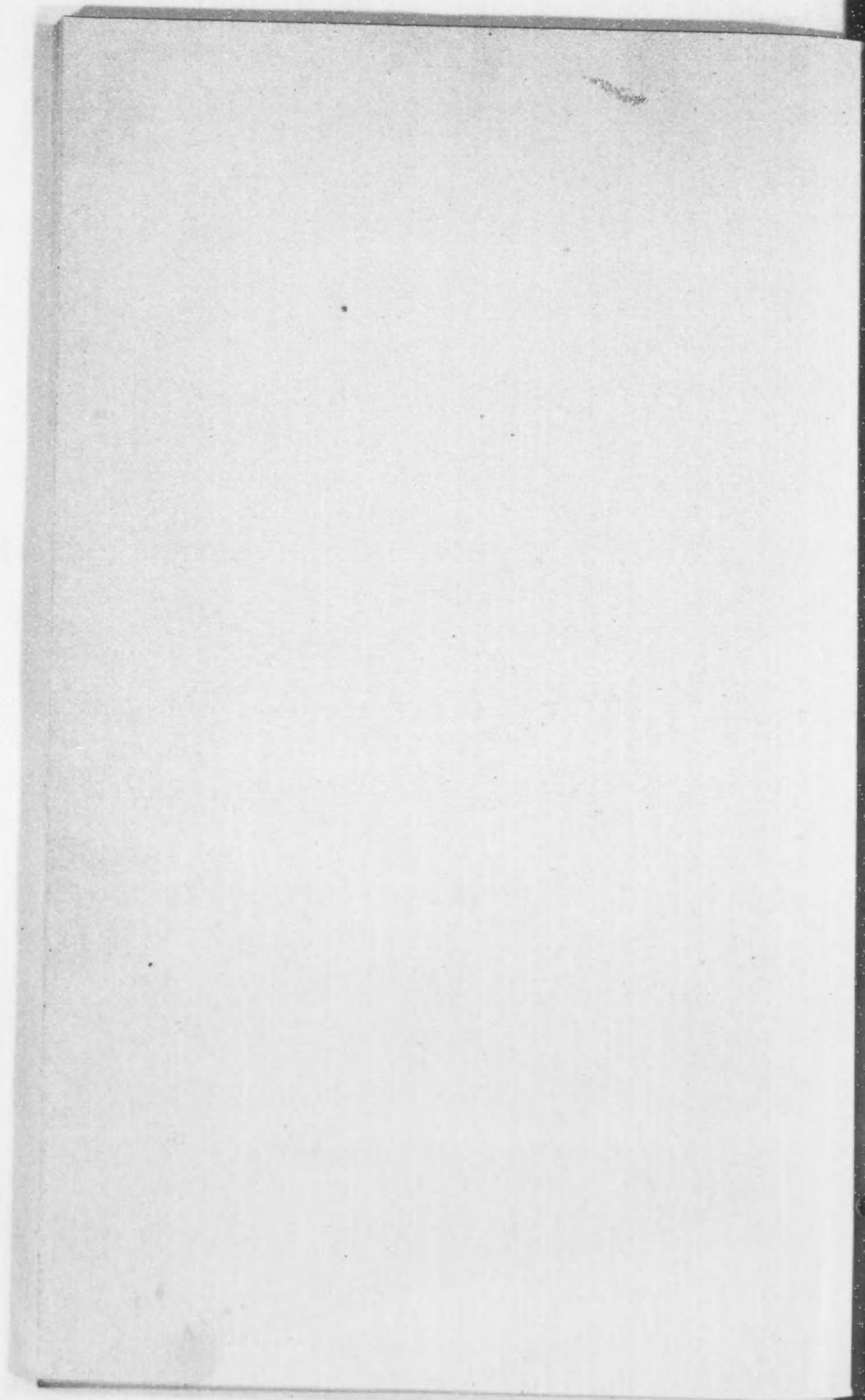
一とせをめぐり會ひける。

夏の日の森の葉がくれ。

歡喜よろこびに言葉もあらず

君を見て我れは泣くなり

廢園終



寂しき曙



寂しき曙

寂しき曙初版

その面は憂愁のスフィンクス
過去よりきたる悲しみの烙印あり
靈は雲に埋れて燃え
荒きすすり泣きの聲、そこより聞ゆ。

(沼のほとり)

神と魚

つねに曙の寂寥に棲む。

太陽は海の彼方をめぐり

夜はまたこのところを忘れ去る。

神の名を彫りてその石を埋め

その石埋れてふたたび見ず。

ああ！ 雪は単調なる世界を築く。

葉もなき木は

凍れる池の上に影を映せり。

長き時を費せども、その影うごかず。

いま見よ。魚は下より浮びいづ。

魚は下より……事もなく外をうかがふ。

沼のほとり

蒼あざざめたる光、音なく

あけぼのは雪の上に来たる。

風は幽ゆかに枝をふるはし

木は屍しかばねの如く、空しき腕かひなを交かす。

そのとき君は沼のほとりにあり。

沼の水凍りて、

煙のごとく「夜」は靡けり。

いかなれば君のここにありしか、
あゝ、いかなればわが眼に、君の視ゆる。

その面は憂愁のスフィンクス、

「過去」よりきたる悲しみの烙印あり。

霊は、雪に埋れて燃え、

荒きすすり泣きの聲、そこよりきこゆ。

木は屍の如くに充つ。

蒼白きあけぼのは今、来たらんとす。

語れよ。無言の君、寂び果てし沼のほとりに。

暗き地平

あけぼのは未だ來ず、

静かにして平らかなる野よ。

風は死人の髪のごとく、

枯枝のほとりに顫ふ。

蒞られざる雑草の上に、

目のごとく露は結びそめ、

その上に暗き空かかりて

星はかすかに青味を帯びて動く。

彼方に地平あり、

黒き断頭臺は、されど地に隠れず。
夜は濃くその上にあつまりたれど、
音もなし。底知れぬ海のごとくに。

夜の碑銘

わが戀人は、墓に眠れり。
かくも静かなる月光の中に、
彼は聲だもせず。

されど我が心の臓は、
今や音高く搏ちひびけり。
あらゆる休息と寂寞との中に、
わが身は熱き呼吸をなす。

月の光は

今宵、「今」を「昔」に返さんと囁き、

樹木の肌はやはらかに、

碑銘は絹の如くにかがやきたり。

吐く息重く、優しく、

戀のなやみは臥床の君を疲らし、

夜毎夜毎にかさなる接吻、

月のかたへに手は白く君は眠りし……

戀人よ。その夜に似て、

あゝ我が胸は、音高くなりまされり。

ただ語れ。熱き接吻を。

長き草の葉の顫ふごとく、

われはいま、「死」の欲情をさます。

呼吸

日は暮れ、日は重なり。

かくてまた夢の如くわれはあゆむ。

投げかくる光は霧に似て果てしもなく

ただ朧にして、眩惑する大氣たいきの中なかを

いづこともなく我はあゆめるのみ……

あゝ、えもわかぬ喪心の歡び、

溫き忘却の夢よ、

日は輝かに沈黙し、

時はおもむろに移りゆけり。

美しき地上の斷片のごとく

わが命は、

光の中に呼吸いきづく。

快樂と太陽と

われは四月の臥床に横たはれり。

大空の光青く、

心の上へのぞみたれば、

われはかくて痛ましき快樂の眼を閉ぢたり……

静かなる、されども物ほしげなる日の光。

あゝかの光こそは我が恐るるものなれ。

愚かにも女、窓を開きてみちびき入れし、

緑の木の間の大なる赤き太陽。

そは告げよ、またも正しき生活のあゆみなるか。

心の放蕩と假借となき、

そはまた憎と勞作との人生なるか。

されど、されど、我が眺めはあまりに悲し。

我が庭は空しくして小鳥さへ飛ばざれば

また流るる水の音も立てねば――

あゝ窓を閉ぢよ、我が女。

いかなれば汝の目の訝しみ我れを見まもる。

そは汝と太陽との、

そは快樂と太陽との、

今や、おそろるべき鬨によりて色移らんとする我が面を。
靈たましひの蒼ざめて顔かほふ面を。
くるしみの犯さんとする我が面を。

あゝ閉ぢよ窓を……

失望

読みさせる「物語」を、
奪ふ者はあらず、
なほも讀め。温かき手を組み合はせ
青春の惱ましげなる目付して
白日まひるの谿底の、
汝なが長さ髪を吹く風を浴ゆみ
息次ぎて、讀みゆけよ——

このもしきは、青き物語の
たちまちに汝が心を魅することなり。
酔ひたる面持の、
されど次第に蒼ざめきたる時。
「あゝ如何にして心は悲しきか」と
やゝありて汝は眩かむ

夕暮きたり…… 眩きも、汝が心も失はれむ。

憐 憫

速かに雲は遠のかんとす。
眺めよ。暗き者の移りゆくを……
かぎりなき秋の野の憂鬱は黄金の落日にほひ
收穫時の荷車は地平に隠る。

涙に濡れし汝の面輪
その青ざめて静かなる、汝のほほえみは
今やわれに失はれし

「春」と「夏」との光より——猶も美し……

季節は過ぐ。

記憶と共に路の傍を。

あゝされど十月の陽は残んの色を染め、

彼方に微風起り

速かに雲されて飛ぶを見れば。

忘れされ、忘れされ、我が女よ

われら、過ぎ去りしあとの静安に

いともいとも、蕭かの言葉もて接吻すべきを。

消えゆく晝

暗き空のもと、

森の梢はうちそよげり。

そは杳か遠方にひそみたれど

わが哀しみの眼は、

木の葉の動く一つ一つさへ見定むべし。

山の麓の貧しき村。

黝き野は彼方にうづくまり

池はまたひろびろと水を湛へたり。
そはすべて消えゆく灰色の晝にも似て
煙の如き風、中空を擾す。

あゝ静かなる、されど心騒しき夜。
われ獨り遠方を悲しむ、
哀れにおぼろなる方を。
暗き暗き森の梢を。

凍えてひびく芭蕉

凍えてひびく芭蕉は、
わが庭に枯れたる色を見せ、
冬は、その聲の中にある。

忘れしすべての希望、
悲しみに滅びゆきし我が心は、
やすらかにいま、眠りうべし。

あゝ、われによるこびあり、
すべてのものは失はれて、
再びわれによるこびあり。
朝あしたに歎なげく小鳥。
その巢をいって汝いましの見ゆる時、
われもまた歌ひいてむ。飾りなき生活よと。

黄昏

われは太陽の青さめたるを見、
われは残る光の谿たに間に落つるを見たり。

いくたびか色かふる黄昏たそがれはきたり、
半圓はんまるの空は遠くのがれんとす。

旅ゆく人よ。

あゝかく静かなる死と沈黙との前に、

こころ悲しく君は希望を失ひしか。

われは太陽の青ざめたるを見。

われは残る光の谿間に落つるを見たり……

冬の詩の中より

雨は銀行の窓にしたたり

雨は荷馬車の旗にもふる、

雨は十字路の鋪石に落ちて

雨は凹みに眼の如く光りただよふ。

あゝ、色青き夕暮の光

くづれゆく寒き地上の雨よ、

冬きたらんとして我が心は、

暗き安息を待つ。

小 逕

あはれなる戀も失はれむ

あはれなるは廂の上

青き葉の濡れてかがやくなり。

惱ましき君の小逕は如何にせし

こころ空しくあこがれし我が夏よ

戀の小逕は如何にせし。

語れ。語れ。

葉蔭の白き微笑は風にまぎれて

青き汝の心より逃げ去るを。

されどもし

されど若し彼の女死したらば、
わが心悲しみにとざされぬべし。
すべてのもの我れより離れ去るとき
その過去ゆゑに君は悲し。

木の梢に死する小鳥のごとく、
再び聞かざるその聲のごとく、
あゝ、いかに戀しかるべき女よ。

廂

午後の空はかがやき、
秋は光の中にあり。

廂にふるる木の枝に、
葉は青く、
ゆくりなき涙をさそふ。

あゝ 君はわがまへに

すわりなれたるところに坐し、
こともなきほほえみをもて
われを見まもりたまふか。

聲にも立てず、我が心は忍び泣けり。
故もなく悲しみもなく、
わが心は忍び泣けり……

別るる君の眼

別るる君が眼のかがやきは、
衰ふる夕の空の彼方、
消えゆく光の斷末魔にも似たり……

ふたたび我れは見ることなし、
あゝふたたび、われはそを聴くことなし。
かく衰へゆく黄金の色の美しさを。

秋はそこより……

ほの白き光をみだす露臺の雨、
暗きあかつきに煙り、
屋根は濡れて、涼しき夜明を待つ。

あゝ、暑くしてちからなき
今はわれらの床を出でて、
終を告ぐる君が夏を嘆き
東の間なりし歡喜の日を思ひいでよ。

ふとづれきたる露臺の雨は、
われらの心を破り、
涙に濡るる暗き臥床に落ちて、
秋はそこより、いつしかに面かがやく。

「眠」の歌

われをして、甘き眠におちいらしめよ。
やはらかなる夜の草木のごとく、
地に落つる月光の影のごとく、
悩める額を静かに、
かくて死の如くも眠らしめよ。

秋のをはり

小猫の背はやはらかに、
秋の日をうけてかがやき、
物の影はあざやかに、地は微温して樂し。

ひとり小窓を閉ぢ、
あゝ、いかなれば汝は語らざるか、
汝の悲しめる額、曇れる眼よ。
青空の光美しく、

樹木はころよき秋を示し、
色黄なる小鳥は草叢くさむらに、死なんとするをよろこぶ。

見よ、すべてのもの温かさ終おわりを告げ、
すべてのものがやけるを。

あゝ、いかなれば口噤み汝の語りいでざる

色悲しきをんなよ、

野は樂しき秋の滅ほろびに充ち

秋の滅は、今は早われらを待つ！

冬

青白き空の色わづかに残り、

折れて落つる木の枝は絶望せり。

森の外たそがれにひびく黄昏の鐘、

黙してあゆめる鳥と人と……

鳥は、落葉に埋れし道にくだり

人はゆくところを定めざる、旅をするにも似たり。

絶望と嘆息とは空を翳し、
冬は共謀人のごとくかれらに来る。
あゝ、いかに佗しく汝は望を失ひしか、
地上に吸はるる鳥と人と、
長くして凍ゆる旅。

心

汝の危き心を愛し、
いと醜き古き家を忘れよ。
ひとり絶望の涙をもて眞實を語り、
祈を思はざるはなほまことに絶望せず。

あゝ、青ざめて泣く苦痛と経験とよ、
なほいまだ汝は絶望せず、
思想は絶望せず。

不信

神もありや我がところに、
よろめける我がところに。
衣ころもをぬぎて身を投げ伏し
われは眠まなこの眼を閉ふづ。

いつしかに我が眼より涙流れいてたり
神よ。祈りを知らざる者は不信の者は
あゝ、啞いましのごとくにして汝を求む。

われは求む、罪おそれと恐怖おそれと膺懲おらしめとを
あゝ神よ。啞いましのごとくにして我は求む
罪おそれと恐怖おそれと膺懲おらしめとを——

ひとりの路

孤獨な思想を愛する者。

夜の枝に、黒い梟が啼き。

わびしい冬の畠を土龍が潜む。

すべて暗い孤獨を愛する者。

經驗

愛といふその愛を、

好き色をもてなぞらへよ。

知らざる色のみわれは見る、

暗きこと、知らざる色のみわれは見る。

翼

色青き空は、なつかしくして捉へかねたり
煙を吐かざる赤き煙突の彼方に
小鳥はVの字の如くに飛ぶ。

ただ飛ばんとするがゆゑに
小鳥はその翼を持てるがゆゑに飛ぶ、
地平に影の消え去るまで。

日没

目に見えざる宮殿をのぼりゆく、
その人人の群の中にも、
われは悲しき、我影を見たり……

あゝ、我が踏むところをして消え去らしめよ。
痛く鋭き聲をあげて、
踏む土の手はわれを捉へむとす。

人人の聲は心失せ、靄の中より聞こゆ。
人人の聲は、黄昏たそがれの日没を超え
われもまた目に見えざる宮殿を呼びて叫ぶ。

屋根の上

青ざめ、物思ふ「夕」の顔。
固く結むすばれゆく唇には
無言の微笑ほほえみのみ、懐かし……
空の彼方は、黄金の色の落日いりひを染め
軟かき夜よのころもの薄うすぎぬは
やく暗くき色にかがやく。

屋根の上に散る落葉
憂愁の都會の中の風に吹かれ
屋根の上に散る落葉は、
暗き我が思ひとともに、凋れて飛ぶ。

音楽

すべてのもの見えがたく
朧かたろの象かたちは薄帛へすきぬを引きよせつつも隠れたれば
ただ悲しみを吹きいづる夜よるの音楽……
ちからなくそは森の上にためいさし
青白き勻の奥にただよへり。

夜の沼はうるはしく
あやしげに猫の死骸もかがやけば

黒と銀との陰影に
身を顛はする夜の鳥は
またも静かに想ひただすむ。

庭の窪地

ものうく単調なる秋の夜に、
雨ふる庭の落葉はひるがへり消ゆ。
風は池のほとりより、
見えざる空に遠のき、
暗くおぼろなる家の方よりして、
鐵琴の音は好き唄を、織りいてたり。
窪地にながるる長き風のうめき、
さややく雨と木の葉と

また折折は暗き汽笛の長鳴も、静かなる夜につつまれ、
庭の窪地にあつまり来る。

あゝ、やはらかなる温かき窪地の暗さ、
捉へがたき音楽の空気。

鐵琴の音はあかあかとその中より走りうまれ、
小兒のごとく懐しく、幼く、
我心をいざなひゆく——庭の窪地まで。

寒き「のぞみ」

草の上に横たはれる

悲しき牛の一群、

その背はひとしく日の下に照らされたり。

暗き秋の野には斑らなる光ながれ、

そこそこに踏みにおられし枯草の根は、

落ちて水だまりに、

土礫と共に沈みゆけり。

眇目の牧人は出てて角を吹けど、
なほ黄昏は來たらず。
日は沈まず……。
わが心は、群を離るる一つの牛よりして
故知らず誘はれ泣く——

眠りのまへの詩

われにきたれ、眠の嘆息、眠の ANDANTE よ。
風は靜かに戸の外にひそみ、
落葉にまぎるる秋の鐘は、
遠くより夢をさそふ。

今宵わが寐床は裝飾もなし、
夢は白き沈黙をもて優しくあまやかさる。
あゝ、深夜薔薇の如くかがやく圓笠の洋燈よ、

戀人の臨終の床のおとづれは、
その明るさよりも哀しからずや。

昔の戀は我が心を鳩の如くにふくらましめ、
昔の戀のやはらかきは杏の花の散るに似たり。

われにきたれ、眠の嘆息、眠の *ANDANTE* よ。

風は靜かに戸の外にひそみ、
落葉にまぎるる秋の鐘は、遠くより夢をさそふ。

秋の夜の小鳥

川の上になびく霧は、
月の光の中に
煙のごとく消える。

あゝ！ さまよふ者の胸に顫ふ
低い夜の囁き……

神祕と空想との中に
闇と光との中に
わびしくなげく小鳥よ。

十月

すべてのもの我れより離れ去る時
われはすべてを愛し
すべてのものを抱く。

秋は五月の花よりも美しく、
秋は白きこと、君が腕よりも
哀しきこと、接吻よりもまされり
あゝ、來らむとする、ものうくして長き夜。

廢れし庭の木の間のささやく秋。
「昔」の秋。

返らぬ日あるがゆゑに樂し、
返らぬ日あるがゆゑにわれは愛す。
あゝ 返らぬ昔となれるがゆゑに
うるはしき秋のわが女よ。……

雨の戀

ぬかるみに落つる雨のひびき、
そが中に明かるき燈火は濡れ
家は煙れる光と色とを投ぐ。

彼の女はおぼろなる方に坐り
彼の女は黒き外套をまとへり。
街の辻角にとどまれる乗合馬車より
彼の女は
堪へがたき一瞬の媚をおくる。

青春

戀人の群にまぢれる
君こそはいと蒼き惱の花なれ。

過ぎ去りし青春は再び戻り來り
夜の泉を飲む旅人のごとく
わが心は、夕にあゆむ。

されど君よ。青春の朝はわれらを訪はず。

われらに來れるものは憂愁の黄昏のみ……。

あゝ、如何に哀しく君は窅音をききたりしか、
耳をすまして君は、暗き薔薇の如く、
近まざりくるその窅音を。

残れる記憶の色

蝗はおとろへて翼を鳴らし
忘れし草叢に日はかがやく。

無慙なる「青」は、
今や過ぎ去らんとする時を示せり……

あゝ、小鳥が梢の嘆。
甘くやはらかに……
そこに聞こゆる、懶い「夏」と「むかし」。

夜の追懐

斜にかざす夜の枝は、
暗き憂愁の世界に、
されど涼しき追懐に顫へゐる……

薔薇色に輝く月、
そは次第に前方の影を濃くし、
聲なき小鳥の柔かき翼に染む。

あゝ、心よ何處にひそむ。
昔ありし、樂しかりし、心よ何處にひそむ。
我が夜は見よ、静かにも優しかりけり。

月と風

つねにそは目指すところなし……

悪しき風に、

病める風に、

我が心はただよひゆく。

都會の屋根に月出て、

憂はしく涙は落つ……

青ざめよ、

消え失せよ、

かくも獨り、うれひある身は。

涙

いかなれば此くも傷つきし
いかなれば我が心破れゆきし？
誰か知る。我が涙は謂はれなく落つるを
誰か知る。誰か知る。

幻の墓

悲しみの庭夜となれば
幽かなるした草の葉もかがやきて
そこはかとなき明かるさに
顛へたる銀の月。朧に黒き緑の上に湧きのぼり、
絡み合ふ小枝の影は洞穴を隈どりたり。

おぢ怖れ、小鳥も今はひそみつつ
落ち静まりし空しさに聲もなし。

耳かたむけよ。あゝされど

あはれなるわが内心はささやけり。

あはれなる我がささやきは夜の樹の膚擦れあひて打つ響き、
なほそれよりも傷ましく――

いま幻に見るは彼の

青草の根にまつはりて流るる泉なり。

冷たき霧にまぎれて、うつらふ光の奥、

かがやく墓をわれは視し。

音なき風のうするごと

今宵しづかに猫の歩みは脱けいでて

影匍ひのぼる墓の上。

終夜。わが悲しみはまどろまず。

終夜。わが悲しみは夢みたり。

あゝ！ まことに微風の、

泉の上にひびける夜。

顫へる銀のしたたりて消えゆく夜。

次第に青ざめし夜……

夢

藍色の花を摘みし子よ。
そのゆめは散りてゆくなり
汝が戀は、
ほのかなる夜よるの間に。汝が眠の間に――

九月の色と響

青草は濡れてかがやけり。
青き翼の鳥は、
子供らしき寢床より羽ばたきして
空地へ来る。

森の中よりつたはりて
翁が吹きいづる笛の響
黄金色なり。

あゝ九月。谿を行けば
静かなる青緑胸ふくらみて
そこはかとなく歎きあひ、
音なく白日の風の寄りくれば
ものうきものに揺すらるる。

九月。九月。

わが想は夢みたり……

あゝ、甘く消えゆく夏の光により、
優しき秋のかがやく響きの中。

汝の戀

やはらかな毛並の小猫は病氣した……

あゝそして冷たい汝の手は蒼白く、

愛すべき指環が、

深い緑に顫へてゐる。

雪が歇んだ……

窓の外。